



ユニフォームの新時代を提案するカスタムマガジン

2017 Sep. vol. 117

9

Uniform

ユニフォームプラス

Plus+



巻頭特集

人に優しく寄り添う ユニフォーム



フレンドの新しい介護スタッフ用ユニフォーム。アイボリーにギンガムチェックの組み合わせがざん新

介護のイメージを変え 介護業界全体の地位向上を目指す!

株式会社フレンドは1990年に栃木県小山市で調剤薬局として創業、介護保険制度がスタートした2000年から介護サービスへ事業を拡大し、「21世紀の健康と福祉をサポートする」という理念のもと、健康保険関連事業を積極的に展開、タイでも介護事業を行っている。今秋、介護スタッフ約450人を対象にユニフォームをリニューアルする。

同社は同県と東京都、埼玉県に21店舗の調剤薬局をはじめ介護保険適用の介護事業としてのデイサービスセンター、グループホーム、ショートステイ、居宅介護支援センター、小規模多機能型施設、福祉用具貸与など45事業所を運営する。

16年には「フレンド 認知症講座」を開始。認知症に対する理解を深めるための活動の一環で、専門の研修を受講した介護スタッフが症状や予防などについて出張して無料で解説する。対象は介護事業所や社会福祉協議会などの専門職向けから自治会、町内会、小中学校、企業まで幅広い。

そんな同社が介護スタッフ向けのユニフォームをリニューアルする。スローガンは「We can change the image of kaigo (私たちが介護のイメージを変える)」。介護現場というメディアなどの影響もあつて、ネガティブなイメージが強調されがちです。でも本当の現場

株式会社フレンド

栃木県小山市

健康と福祉をサポート
幅広く事業を展開



介護ウェア編

人に優しく寄り添う ユニフォーム

株式会社フレンド (栃木県小山市)

介護用ユニフォームが活況を見せている。事業所、サービスが多様化していく中、現場で働くスタッフからユニフォームへの関心や要望が高まった結果、既存のウェアにはないアイデアが生まれてきた。今回は「介護業界のイメージを変え、仕事にもっと誇りと自信が持てるユニフォームを」という強い思いに貫かれたリニューアルプロジェクトを紹介する。

は、高い志を持ってこの業界に入り、懸命に働くスタッフがたくさんいます。同社の総合企画・広報を担当する山口万理子取締役が話す。

同社の介護スタッフはこれまで既製品のポロシャツを着用していた。リニューアルにあたっては現場のスタッフが「着たい!」と思える1着を形にするべく、大手スポーツアパレルメーカーで勤務歴がある山口氏が各事業所から選抜したスタッフを中心となり、ルートキャリア(東京都千代田区)が展開する介護業界の就業促進事業「HELPMAN JAPAN(ヘルプマンジャパン)」との共同プロジェクトに発展。さらに「日本一カッコいい介護福祉士」として活躍する杉本浩司氏が参画した。

地位向上と志 リニューアルに込めた思い

「新ユニフォームには2つの思いを込めました」と山口氏。「1つは介護のイメージを変える、『介護業界全体の地位向上』。2つめは『高い志を持って介護業界で働

アイボリーを選んだ理由 仕事の顔、チームの印に

試着したスタッフに感想を聞いた。「デザインが新鮮。現場の仕事で着るのが楽しみ」(松尾一哉さん、入社歴8年)。「白は清潔感がある」(横山史佳さん、同)。「パンツがいい。適度にフィットしてストレッチが効いている」(毛塚真琴さん、4年)。「明るくひきしまったイメージで、利用者、家族の方にも喜んでもらえるのでは」(得能明子さん、10年)。「介護の仕事に日々、理想と現実にギャップもあるが、フレンドはやりたいうことをさせてくれる職場。新しいユニフォームでやる気がアップします」(馬場早織さん、10年)と、年齢、性別問わず評価は高い。

酒井有希さんはプロジェクトメンバーの1人。「3年前にこの仕事を始めたとき、友人から『大変だね』『ほかに仕事ないの?』とよく言われました。予想以上にマイナスイメージを持たれてショックでしたが、『それなら自分たちが変えていこう』と強く思いました」と話す。

汚れが目立つアイボリーをあ



介護は「ハート」です



プロジェクトメンバーとして参加した酒井有希さん



絞られた2案からウェブ投票で決定した



2016年からスタートした「認知症講座」。介護スタッフが無料で出張する



ユニフォームリニューアルは外部のパートナーも参画

Company Profile

株式会社フレンド

栃木県小山市羽川524-2
http://www.f-pw.jp



写真は同社が栃木県宇都宮市の国立宇都宮病院敷地内で運営するサービス付き高齢者向け住宅「ブルミエール・アミ岡本」。



Dカンが小物の携帯に活躍しそう



シャツの袖口にコーポレートロゴ



投票で決定したデザインのお披露目は忘年会。



山口万理子取締役

く介護スタッフが、今まで以上に介護の仕事に誇りや自信を持ち、前向きに取り組んでもらいたい」という思いです。

スタッフにポジティブなスポットライトがあたり、本当の介護を知ってもらえば、ネガティブなイメージを変えていけるはず——山口氏の言葉から、リニューアルに込めた強い決意が伝わってくる。

こうして完成した新ユニフォームはボタンダウンの半袖シャツにパンツのセットアップ。濃紺のギンガムチェックが衿と身ごろ、胸ポケット、パンツに配され特徴的だ。

素材は上下ともポリエステル100%のストレッチツイル。シャツはアイボリーホワイトで、動きやすく通気性に優れ、防透性も併せ持つ。オフホワイトは清潔感があり、サービス利用者には優しい印象を与える。

パンツはサイドにニット素材のラインを入れて伸縮・動作性をアップ。右のポケット近くに小物を下げられる金具「Dカン」が装着されており、スマホや送迎時の運転免許証など、携帯品が増えるときも便利だ。

えて採用したのは、着用者が汚れないよう注意することで、いねいな作業や衛生管理の向上を図った。「大切に着ることで愛着が強まるはず。仕事の顔、チームワークの印になって欲しい」。

介護用には就労人口増を見込んでさまざまなユニフォームが開発されてきたが、売れ行きはなかなか伸びていない。福利厚生の手算不足に加え、「家庭的な雰囲気」を大切にしたいといった理由からユニフォームを採用しない事業所もあるためだ。介護保険制度開始から今日まで、サプライヤーとユーザーの試行錯誤が続いてきた。

「ユニフォームを変えたからすぐに、すべてが変わるわけではありません。しかし何も行動を起こさなければ何も変わりません。今回のリニューアルをひとつのきっかけに、今後も介護のイメージを変える取り組みを行っていきます」(同社)。事業者自らが積極的に発信していくことで、やりがいと誇りを持つ介護が確立されていく。そんな将来を予感させてくれるプロジェクトだ。